西洋雜記　貳

リ伊9
3815
2

西洋雜記巻二

目録

聖人美瑟(モセス)の説
ギリーキス國の名畫の説
取火鏡を以て敵船を焼く説
天下の奇女といふ説
入尓馬泥亞國(ゼルマニア)にて異獣を得る説
和蘭國(ホルランド)にて海中の女人を得る説
波尓杜尾尓國(ポルトガル)識記の説
伊斯把你亞國(イスパニア)人呂宋國(ルスン)を奪ふ説

附
テイリユス國女王カルタゴ城を築く説
西洋暦法の説
西洋天文の原始
西洋上世鬼神の説
西洋圖畫に譬諭を設くる説
亞細亞(アジア)亞弗利加(アフリカ)の像の説
ギリフヒウンの説
弗尼思(フーニス)鳥の説
稽没辣(キメラ)山の説
セ井レデ子ンの説

馬哈黙(マホメツト)の説
印度(インド)國佛法の説
日月を神とする説

西洋雜記卷二

聖人美瑟(モセス)の說

昔西洋中興の時を去ること一千五百年前（今を去ることハ三千三百餘年前にして唐土夏殷の世の間に當る）小加徳亜(ジュデア)國に大聖人あり美瑟(モセス)といふ聖徳神靈にして諸國の人みな其教に化す後に阨入多(エジプト)國に到りて教を施するに國人みな信從す國王これを怪(アヤシ)み悪(ニク)みて兵を遣しこれを害せんとすれ衆人すなはち美瑟(モセス)を保護して東に向ひて去る國王いよいよ怒りて大軍三十六萬を興して是を追ひて

西紅海(ローデゼイ)にいたる。此時海水忽に開けて陸地となり、美瑟(モセス)等衆人ミな渡り去る。阨入多(エジット)国王の軍卒も追いできて是を渡る。海の半に至りしに、天より忽ち狂風を起し、暴雨を降し、海水大に湧(ワ)き揚(アガ)りて、三十六萬の大軍一時に溺死せり。是より美瑟(モセス)は亜剌(アラ)比(ビ)亜(ア)国に至りしに、天その徳に感じ、甘露を雨(フ)らせて是に賜ふこと是よりして、此甘露いまに至りて絶へずとなり。此他一生の間、奇異の事跡甚多しといふ。美瑟(モセス)が撰することろの典礼法制の書および上古の歴代史記等、皆今の世に傳はりて諸国の規模(キモ)

とす。美瑟(モセス)の墓は如徳亜(ジュデア)国の深山の洞(ドウ)中に在て、諸人恒(ツネ)にこゝに至りて礼拝を行ふといへり。

按にこゝにいふ甘露は、すなはち所謂(イハユル)甘露蜜なるものにして、西語「マンナ」また「ホーニフ。ダーウ」といふ。（和蘭語「ホーニフ」は蜜なり「ダーウ」は露をいふ）今多く亜剌比亜(アラビア)国および亜弗利加(アフリカ)の地に産れ、又欧羅巴(ヨウロッパ)洲払郎察(フランス)国中の「ダウヒ子」（さき払郎察(フランス)国にて世子その太の内子の禄食に供するの地なり）「ワレアンソン」といふ地、毎年八月に至るごとにならび甘露ふる。然して「レェウウェリッキ」といふ樹上に降(フ)ることも最多し。その降(フ)るの始めは露なりと

いへども忽ちに凝(コ)りて脂(アブラ)の如し。その味沙糖に異
ならず。國人これを珍重すといふ

「ギリーキス」國の名畫の説

昔「ギリーキス」國アレキサンデル大王の畫工セウキシス
と云ものきはめて圖畫に巧なり。かつて大王の命によ
りて蒲萄(ブダウ)を畫くその彩色形状宛然(エン・アタカモ)として真の如し。
これを壁上に掛る時ハ窓外の禽鳥これを見て皆以て
真の蒲萄なりとして相聚(アツ)まりて毎(ツネ)にこれを啄(ツイバ)まん
とせしとなり。畫圖の巧妙に至りて萬國すべて相な
らずといふべし

取火鏡を以て敵船を焼く説

昔西齊里亞(シシリア)島「セイラキュサ」國王の天文師に亜尔幾墨(アルキメ)
得斯(デス)といふ者ハ資性霊慧にして事をなすこと殊に其妙智
人意の外に出づ。國王是を重んじて匠作大監の職を兼ねし
む。ある時邏馬(ローマ)國と比産齊何(ヒサンシオ)國と兵を合せて「セイラキュ
サ」國を併(アハ)せんとて數百艘の大船を泛べて西齊里亞(シシリア)の海
上に陳ぬ。其兵勢甚盛にして島中の人皆震ひ恐る。此時
亜尔幾墨得斯(アルキメデス)一個の大なる取火鏡を鑄て是を敵船
の向ひ来る海岸の岩上に置きて天日に照して敵船に
むかふに。鏡光と日光と相照して光發し海上悉(コトゴト)く火を成して

數百艘の兵船一時にことごとく焼盡して一艘も留めずとなり。此の亞尔幾墨得斯(アルキメデス)ハ天文測量の事に其志きはめて深くしてその後臨終の時までも尚測量せ圖を地に畫(ヱガ)きながら終りしとなり。此鏡を以て敵船を焼きたるをハ「シン子ベェルデンハン。キリステレイキ。ホルスト」といへる書に其圖説ありまたボイスといふ人所撰の學藝全書にもほぼ其事を記し又亞尔幾墨得斯(アルキメデス)が國王の命によりて極めて大なる船を造りたることを萬國航(カウ)海圖説に記す然れども此説を森島氏紅毛雜話の中に其譯文を載れ故に是に贅(ゼイ)せじ

　天下の奇女といふ説

昔邏馬(ローマ)のコンスタンチニユム帝の世に當りて。百兒西亞(ペルシア)國主オデナチイ其勢まさに盛なり。其后セノオビア猛勇絶倫にして。衆みな畏服し。學才殊に秀でゞ。よく阨入多(エジツト)。西利亞(セイリア)。厄勒祭亞(ギリーキス)。羅甸(ラテン)等。諸國の文字言語に通じ。恒に其夫王と共に兵を用ゐて。諸國を征伐し。陣に臨むごとに奇計を以て敵に勝ずといふことなし。遂に大業をなして。世ニ東方諸國に雄長たり。世に是を称して。「ウヲンドルフロウー。ハン。カンツ セ。ウェエレル

「ド」といふ是れ天下の奇女といへる義なり

入尓馬泥亜國にて異獣を得たる説

「サルツ。ビュルグ」ハ入尓馬泥亜國の「ベイエルス」道に属す
るの地にして其國山岳多し。僧官の主ありて是を治
む。西洋中興第一千五百三十一年（日本享保四年。唐土明の嘉靖十年辛卯にあたる。）
に獵人此地の深林において一箇の怕るべき形状の異獣
を得たり。全身毛をなそぶ濃厚にしてその色淡黒四
足を具して爪きはめて尖利に。頭面ハ少しく人に
異ならず。一度吼るときハ其聲地に震ふ。獵人生なが
ら捕へて僧官の府城に輸れ皆以て奇観なりとす。

然れども絶て飲食せず。其性情および食料得て量り
知るべからず。凡三日にして斃るといふ。

和蘭國にて海中の女人を得たる説

西洋中興一千四百零三年（日本應永十年。唐土明の永樂元年癸未にあたる。）和蘭
國「フリース。ランド」の人。その部内の「ピユルメル。メエル」と
いへる海湾の水中に於て一の異物を得たり。其身體
形貌すべて女人に少しも異なることなし。則是を「ハー
ルレム」（阿蘭陀國中都會の地）に送るところに衣服をあたふれバ則着
れ飲食をあたふれバ是を食ふ。たゞ唖にしてものいはず
とあるてげるのみ。神像を見れバひざまづきて敬を起して

俯伏ハ國王これを憐みつゝ奇なりとして豊に衣食を給ハ存活すること多年なりしかどもこれ人に似て人にあらねど其性情および海中に在しハいかなる所に在り。何をなすものなるや知るべからず。怪むべし

按に明儒の飜譯しる萬國圖説および坤輿外記に二百年前西洋喝蘭達把の海中にて一の女人を得たるよしを記ハその即是なり西書にこれを「ゼエメンセン」海人といふと又「ゼエフロウー」海女の義と記せりまゝ按に洽聞記晳神録續墨客揮犀等に海人の事を説き草木子に金の時

に水中に人の形現はるゝ事を論じて水にもまた人類あるらんなれど幽明相隔て知るべからずといへる言あり。蓋人魚の類なり。人魚の事ハ六物新志に詳なり故に是に贅せず。

波尔杜尾尔國識記の説

西洋中興一千七百五十五年に日本寶暦五年。唐土清の乾隆二十年乙亥に當る。波尔杜尾尔國「ヨーセフス」第一世の王一名「ヨーセフスユマニユウル」と云此國「ヨハン子ス」第五世の王の太子なりの世に當りて。其國都里西波亜城に大地震ありて城垣崩壞し都内の人家摧倒せるもの凡五萬餘家城下の得若といへる大河に浮める大船壹艘海水鳴動に隨て小山の樹に掛る地震の響なるゝに入尔瑪尼亜拂郎

察等の地にきこゆ。實に近世の奇變なり。初波尓杜尾尓國の始祖ヘンリキュスと云もの。此國を開基して里西波亜の城を築く時に賢者未来の事を前知する者ありいはく。此城造建より後よく六百六十六の數を保つべしと。其事ヨハン子スと云る人の紀錄に載せあり。その是を築きけるハ中興第一千零八十九年の事なり。（日本寛治三年。唐土宋の哲宗元祐四年己巳にあたる。）さうして此地震の時に至るまで凡六百六十六年なりといふ。嗚呼奇といふべし。

伊斯把你亜國人呂宋國を奪ふ説
附「テイリュス」國女王「カルタゴ」城を築く説

呂宋國ハ。亜細亜洲南海。非利皮那諸島の一にしてその地最大なり。土氣暑熱にして。多く米穀諸菓胡椒肉桂沙糖黄金真珠等を産ず。西洋中興の千五百七十二年に（日本元亀三年。唐土明の隆慶六年壬申に當る。）伊斯把你亜國の人併せてこれを有ち都督を置てこれを治め。僧官を署して教を布く。明世諸書ミないはく伊斯把你亜人（舊本ミな佛郎機に作るものハ誤なり。今是を改む。）此國に通商し。其國兵弱くして奪ひ取るべきを計りて。則黄金を其國王に貢して牛皮の覆ふほどの地を得て是に居らんことを請ふ。王是を許す。伊斯把你亜の人則牛皮を細く長く裁して線となし。是を以て多の地を

廻繞してあまた城郭を建て兵備を嚴重にす王これを如何ともすることあたはず其後遂に兵をもつて國都を圍み王を殺して其地に據るといふまた鄭居仲が撰するところの鄭成功傳に和蘭の人臺灣の地に據るの事を記し其の牛皮を裁るの事ありて是に同じ再西史を按るに昔「テイリユス」國の女王ギトといふもの甘的亜島を併せ遂に「アフリカ」の地にいたり金寶を其土酋に遺り因て牛皮の覆ふほどの地を乞ひ得て牛皮を細く裁りて線となして多くの地を圍み要害堅固なる都城を築きて「カルタゴ」と名け是を基本となして次第に其邊の諸州を併せたりといふこれ西洋開基第三千零八十年の事にして（唐土周の厲王十一年癸巳に當る）今を距ること二千六百二十五年前なり蓋伊斯把你亜もしくは和蘭の人此女主の故智を用ゐるものならんか

西洋曆法の説

曆法に「ゾン子。ヤール」「マーン。ヤール」の二種あり「ゾン子」は日なり「ヤール」は年なりこれ太陽の曆にして日の躔度に因て年をなし時を分つ如徳亜欧羅巴阨入多等の曆法これなり「マーン」は月なり是太陰の曆にして

月の圓鈌(ユンケツ)によりて年となし。時を定む。唐土。天竺。亜剌(アラ)比亜(ビア)等の法なる是なり。太古「ヘブレウス」の暦法ハ太陽の暦にして。其正月を號して「ニサン」といふ。是今の西洋の三月と四月の間に當るといふ。邏馬(ローマ)國の始祖「ロムリユス」鴻業を開きて王位に即(ツ)き。制度を建(タ)て正朔を改め。一年を分て十箇月となし。今の西洋の三月をもつて正月となす。其後「ニユマ」王の世に至りて改めて今の如くに十二箇月となれり。然れども毎月の日數今とハ異なり（四月を二十九日とする類なり）。其後「ジユリウス。カーエサル」帝欧羅(ヨウロツ)巴(パ)洲を一統せしよりして。始て今のごとくの日數を定

めたり。今西洋の元旦ハ此方の冬至よりして第十一二日め比にあたる者を稱して「ニイウウエ。ヤアルス。ダック」といふ。すなはち新年の日といへる義なり。

正月を「ヤニユアレイ」といふ（「ラテン」語なり以下同し）。日數凡三十一日あり。和蘭語一名「ロウー。マーント」（月）といふ。此月二十三日に日輪廻(メグ)りて寶瓶(ホウヘイ)宮の初度にいる。

二月を「ヘブリユアレイ」といふ。日數二十八日あり。和蘭語一名「スプロツクル。マーント」（芽生月）といふ（いにしへハ此月二十九日ありしを。アウグストス帝の世に此月を二十八日となして「アウグストス」の月を三十一日とする。これジユリウス。カアエサル帝の例を用うるとなり）。

三月を「マールト」と云。日數三十日あり。和蘭語一名「レ

ンテ。マーント(春月)」と云。
四月を「アップリル」といふ。日數三十日あり。和蘭語一名「ガラス。マーンド(草月)」といふ。「アップリル」ハ上古の世の神人の名にして古の神海泡(アワ)より出て此月「ギリーキス」國に現はるゝによりて名くといふ。
五月を「マーイ」といふ。日數三十一日あり。和蘭語一名「ソルウイ。マーンド(発生月)」といふ。一にいはく「マーイ」ハ花の名にて。此月にいたりて開く故なりといふ。
六月を「ユウ子井」といふ。日數三十日あり。和蘭語一名「ソメル。マーンド(夏月)」といふ。

七月を「ユーリイ」といふ。日數三十一日あり。和蘭語一名「ホーイ。マアント(草月)」といふ。(古ハ此月三十日なりしを「ジユリウス。カーエサル」帝の世に改めて三十一日となせり。)
八月を「アウグストス」といふ。日數三十一日あり。和蘭語一名「オックスト。マーンド」といふ。此月二十三日に太陽廻りて室女宮に至る。此月古名「セキュステリス」といふ。こハ第六といへる義にして昔ロムリス王の世にハ今の三月を以て正月とせしゆゑ此月ハ第六月に當りし故なりといふ。「アウグストス」ハ其後の王者の名にして此月を以て即位せしによりて月名を改め名けるなりといふ。
九月を「セプテムベル」といふ。日數三十日なり。和蘭語一名

「ヘルフスト（秋）。マーンド（月）」といふ。「ラテン」語ニて「セプテム」ハ七といへる義なり。古ゟ今世ニ至りても尚ロムリュスの時の舊称を改めさるなるへし。（以下十月十一月十二月皆是ニ同じかるへし）

十月を「オクトヲベル」といふ。日數三十一日あり。「ラテン」語「オクト」ハ八なり。和蘭語一名「ウェ井ン（酒）。マーンド（月）」といふ。

十一月を「ノオヘムベル」といふ。日數三十日にて「ラテン」語「ノオヘム」ハ九なり。和蘭語一名「スラクト。マーンド」と云。

十二月を「デセムベル」といふ。日數三十一日あり。「ラテン」語「デセム」ハ十なり。和蘭語一名「ウ井ンテル（冬）。マーンド（月）」といふ。

カアール。ゴロオト帝の世までハ此月の別名を「ヘイリゲ。マーント」と號ハ是聖月といへる義ニして、むかし聖人某なるもの此月誕生しける故なりといふ。

以上十二箇月三百六十五日六時なり。四年ニ一度二月を二十九日となして壹年三百六十六日となる。彼方ニてハ一晝夜を二十四時ニ分ち、子の刻より午の刻までを十二時となして、午の刻より子の刻までを十二時となす。此の法ハ上古の世ニ阨入多（エジット）國より傳へけるものなりといふ。

阨入多（エジット）國の暦法ハ太陽の暦なり。一年十二箇月三百六十五日ニして餘れる時刻分杪なし。毎月各三

十日にしてわづか十二月のミ三十五日となす。

亜刺比亜（アラビア）国の暦法は太陰の暦なり。一年十二箇月三百五十四日八時四十九秒なり。三十年に十一閏を置く。但し閏とは此方の閏月ならず閏日にして一年三百五十五日とするをいふなり。

都児格（トルコ）国又此暦法を用ひしといふ。按に是夏暑冬寒に拘らずして一年をなせるものならん。

亜刺比亜（アラヒア）の十二箇月は「ミエハルラム」正月「サハル」二月「ラヒア。プリオル」三月「ラヒア。ポステリオル」四月「ヨマダ。プリオル」五月「ヨマダ。ポステリオル」六月「ロヤアラ」七月「シカアバレ」八月「ラマダン」九月「シカワッル」十月「デュルカンダル」十一月「チュルベッシレア」十二月なり。然して毎年正三五七九十一の六箇月は各三十日にして二四六八十十二の六箇月は各二十九日にして合せて三百五十四日なり。時として十二月に一日を加へ三十日となして三百五十五日となすことあり。

天竺にて八月の圓なる時を以て月首とするよし。支那の諸書より出づ。或誤りて天竺は朔望ともに月尽とるといふ者あり。笑ふべし。

真臘（今の柬（カ）埔寨）にては支那の十月を以て歳首とし閏歳にはかならず閏を置く。但是閏九月なりと。真臘

風土記に見へたり。

西洋天文の原始

西洋天文星象の學ハ上古の世に阨入多(エジプト)國に於て始めて是を造作せり。其道を彼方諸國天學の權輿(ケンヨ ハジメ)とし。天竺の天文も蓋彼方より傳へたるところとみえて十二宮のこと不空三藏所譯の宿曜經にみえたり但し二十八宿を日月に配することハ決して天竺の説にハあらざるべし。二十八宿の事ハ支那古聖の定むるところにして天竺まて悉是に同じかるべき理なし其道けだし不空か牽合附會せるなるべし其道によりて思ふに古来

翻譯の佛書の中にハ。附會の説定めて多きことと思はるゝなり。

西洋上世鬼神の説

西洋諸國。上古の世よりして。聖人多く興りて教をたつといへども。昔時ハ種々の鬼神を尊信するもの多く。奇異怪誕なるものハ奇異なる譬喩の類きもあまた夥(オビタヾシ)きなり。邏馬(ロマ)國において上古の世にも「ユピイテル」歳星「子プトニュス」「アホッロ」「マルス」軍神 熒惑「メルキュリウス」辰星「ヒュルカニュス」の六の天神。する「ユノ」「ミ子ルハ」「ヘニュス」太白「ヂアナ」「セレフ」「ヘスタ」の六の天女を崇信し。

合称して「コンセンテス」といふ。此十二神を各月に配し。また黄道十二宮に配す。のち「ミ子ルハ」を白羊宮に配し。「ヘニュス」を金牛宮に配し。「アポッロ」を雙旋宮に配するの類なり。日月五星四元行等ミな其像あり。邏馬(ローマ)國にてかつて上古の世に圓形の大殿を建て熒惑太白の二神を奉じ其他種々の鬼神を附祀す。其巧妙美麗世に名高し。此殿を名けて「パントン」といふ。（此殿今尚存す。然れどもコンスタンチニユム（名）の大帝の世より前奉するところの諸神を除くといふ）此他諸國ミな此等の諸神を奉じ。然して阨入多(エジット)に祭るところの像それ種類最多しといふ。阨入多(エジット)國人

の説にいはく。太古の世に「ケエフ」といふ尊神なり其口中より一卵(ラン)を吐く。全世界此卵より生ずるゆゑ世界開基の始なりとす。故に其像巨大にして手に卵を捧(サヽ)ぐるの形をなす。またいはく「セイヘレ」といふ女神あり。天を父とし地を母として生まる。鎮座の正妃となり。諸神ミなその生むところなり。故に號して神母といふ。またいはく天下の諸獣ミな此神の聲音氣息によりて生ずるところなり。其像頭に寶冠を戴(イタヾ)き手に一の鎖鑰(サヤク)を把(ト)り百花を衣となし。諸獣恒にその傍に圍繞れあるひは時として寶車に乗り。四の

獅子車を駕れ。又「ギリーキス」國中「ペロポ子ンシュス」の地におゐて一の歳星の祠を建つ。其荘厳美麗なること紙筆に竭(ツク)すべからず。みな黄金諸寶石を以て修飾しつつ其巧妙精密世に絶(スグ)れたり。正中に歳星真形の極めて大なるものを安置し。傍(カタハラ)に諸神を附祀れ。これ天下七奇の其一なり。又鎮星の女を「セレス」といふ。是を農神と称れ「バッキュス」といへる神と共に太古の世に耕農の業を人に授けたるによりて。如此に称す。さて又それ「バッキュス」といふものハ歳星の子にして其状肥たる小児の如し。世の醸(カモス)酒(ジヤウ)の事を護(マモ)る故に称して

酒神とれ。又鎮星の子に「シロン」といふ者あり。其像半身人にして半身ハ馬なり。これをいのるといふ。此神は狩を好んで馬に騎て弓矢を挟(サシハサ)みて高山に登りまた衆の薬草を試みて其性功を區(マチ)別(ク)して上世此名醫なりき。其他天象輿地の學を極めのち歿(ボツ)するに及びて其霊魂天に昇(ノボ)りて十二宮中の人馬宮となりき。るがゆゑなり。また歳星の女を「ヂアナ」といふ。世に是を獵神と称れ。此神神通廣大にして一體三名あり。天に在りてハ「マーン」月輪を云と現じ。世界にありてハ「ヂアナ」と称し。地獄にありてハ「ヘカッテ」と號れ。相傳ふ此

神夜二天より降りて其尊信する者にはよく福を賜ふと故に世に多く是を祭祀れり然して其祠廟小亞細亞の厄弗俗國に在る所の者最世に名あり（南懐仁が説には是を供月祠廟といふはその天に在りて八月を現ずるの意あるか）其造建凡二百餘年にして始めて成る中に一百二十七株の美玉の大柱ありてその美麗巧妙人の心思の及ぶところにあらずされ今を去ること二千六百餘年前に亞瑪作搦の人建てしものにてすべて天下七奇の其一なり（此祠廟の事第一巻にも既に出づ）その他此類の諸神をまつるもの多しまた或は邏馬國第二世ニユマホム。ヒリウス王の代に「チアナ」天よりく

だりて一の清泉を邏馬の地に湧出さしむ孕婦これに浴するものは皆安産す王その霊應を尊みて祠廟を彼國に建し事ありとまた或は上世に「テイホン」といへる一巨人あり其婦を「エキトナ」といふ半身は女にして半身は蛇たり其生むところの第一子を「セルベリユス」といふこれ三頭三喙の犬にして地獄の門戸を守る悪人の霊魂地獄に墜つる者あればすなはち是を噛むその他「ヘイダラ」「レルナ」「キメラ」「子ノアレ」等の諸子皆異形なりといふ然して中世に至りて聖人あまたく出生して法教日に明なり又コンスタンチニユムカーレル

○ゴロート等の諸聖帝政令を定めて妖妄の浮言を禁制し諸國の邪魔の廟及び種々の淫祠を悉破滅してより邪靈魑魅諸妖盡絶ゆ今に至りて邪妖の人を迷はすといふことなしといふ則知る邪妖ハ人によりて興るといふこと誠に萬代不易の金言なることを

西洋圖畫に譬諭を設くる説

西洋の畫圖のきはめて縝密にして所寫の精妙を致むるハ世に知るところなり然して其畫中譬諭となすもの甚多したとへバ書籍の首に其撰者の像を畫ル傍に「エンゲル」とて羽翼ある天人を圖し或笛を吹く形なるハ「エンゲル」の遠く飛び笛聲の遥に聞ゆるがごとく其撰者の聲價遠聞すべきの意に取るなり又マーリンといふ人ハ拂郎察國の人にて拂郎察語と和蘭語とを合集したる釋辞書を著せり其後和蘭の人ハルマと云者是を訂正して二國の釋辞書を著せり其首の圖に上面にハルマの像を畫き下に數箇の人マーリンを蹈つぶす其傍に臭氣を避けて鼻を掩ふの人あまたあり其の蹈潰するハマーリンの書をすて新に訂正するの意を示し臭氣を避くるものハマーリンの書の紛雜してよろしからぬといふこと

を示(シメ)すの意なり。其他此の如き類頗多し。まゝ彼邦に
昔よりして「ヒッポ。センタウクュス」といへる異形の像あ
り。これ其半身は人にして半身は馬なり。是は上古の世
に始めて「デッサリア」國「ギリーキス」に属する地を開きたる人あり。
此人もはじめて其地に至りし時に馬に騎まゐり。その時
「デッサリア」國の地にはいまだ馬といふもののなきゆゑに
土人これを見て大に驚き怪みて人馬合せて一體な
りと思へり。其後此人それ土人を教化して大に徳を施
して人みなこれに懐(ナヅ)く。これよりて此人の始めて其
地にいたりたる時の像を画き且其徳の人に勝れたる

を表して異形に飾を加へたる者なりといふべし。
西洋にて古人の肖像多く傳はりて。西史の首に二三
千年以来の名ある人物の肖像數百を圖せり。其中
に邏馬(ローマ)のコンスタンチン第二世の帝の像あり。小傳の
下に記して曰。此帝の肖像を画きたるその今傳はるは
然れども此帝の時所造の銭貨尚(ナホ)世に存して。銭文に
帝の面あるによつて。此に摸寫(モシヤ)したり。則知る其
他の肖像もみな的實なる者にして。あへて私意を
以て画きたるそのまゝにあらざるなり。

亞細亞(アジア)亞弗利加(アフリカ)の像の説

西洋の畫譬諭を以て亞細亞亞弗利加の二洲を圖して皆人の形となす其亞細亞ハ婦人にして身に繡衣を衣て諸種の花薬を荷ひ右手に丁子胡椒香桂等の枝を把り左手に香爐を捧げて「ウヰイロオク」香脂の名を薫じ駱駝その後に随ふそれ亞弗利加もまた婦人にして黒色裸體縮れたる毛身に満ち鼻ハ象に同しく頭に鳥羽を飾り右邉に獅子あり左邉に大蛇および蝮蛇あり是らみな其地方の產物を以て譬像を設たる者なりといふ

「ギリツヒウン」の説

「ギリツヒウン」ハ極めて奇異なる生類なり其體に四足を具へ然して前半身ハ全く鷲にして翅あり耳聳て長し前足もまた鷲の足なりまた後半身ハ全く獅子にして尾長く後足もまた獅子の脚なり是北荒の地に產するとせられそのものにして其鷙猛なるべけられといふ然れども世に絶へて見ざる者なり或ハいふ上古の世阨入多國の淫祠中に此像を設けたり寓言のみ

弗尼思鳥の説

西利亞國の邉に一種の奇鳥あり弗尼思と名くそれ

其壽六百六十歳なれバ則その壽の終らんとする際を知る。因て「ウヰイロオク」香桂等諸の香木の枝を以て巣を作りて其上に居る。天氣熱するの日を待ち、太陽の火を取てやつくに自焚死(フンシ)れ。それ骨肉遺塊よりして一箇の蟲を生じ、此蟲すくく化して弗尼思(フーニス)鳥となるといへり。あるひハこれさへも寓言にして、上古の世に「フウニシア」國(西利亞(セイリア)三大國の一)子孫傳統して文華盛なるの意をもてその譬諭となせしものなりといふ。

晳沒辣(キメラ)山の説

那多里亞(ナトリア)國利細亞(リーシア)の地に大山あり。晳沒辣(キメラ)といふ。此山に一種の異獸あり。頭ハ獅子にして身ハ野羊のごとく、尾ハ龍に同じく、口中より火烟を吐(ハ)く。これを名けて「ヘツレロホン」といふ。世に其圖を傳ふ。然れども是又寓言にして、此大山其頂上恒(ツネ)に火烟を噴(フ)き、その邊獅子多く、半腹ハ平衍(ヒエン)にして豊草繁衍し、野羊蕃息し、下邊ハ沼澤多くして龍蛇住し、人みなむかしより是を怕(カリ)れて往く者なかりしを、「ヘツレロホン」といふ異人始めて衆を帥(ヒキ)ゐて此山を開きて是に居住せしゆゑなりといふ。此事ハすべて利瑪竇が著せし坤輿全圖にも見えたり。

「セ井レデ子ン」の説

「セ井レデ子ン」ハ海中に生ずる一種の怪物にして。その上體ハ婦人にして下體ハ魚なり。よく魔魅の妖術をなせり。若其聲を發して歌を唱ふが如くなる時ハ。風波大きに興りて海舟を覆没す。此物意太里亜國の属島西齊里亜の海邊にありといへり。然れども唯此説をいひ傳へて世に其像を画きて。宗飾を加ふる者ありといへども。たえて的實に此者あることをきかず。けだしまさに昔時の寓言ならん。

馬哈黙の説

回ニハ西域大食國種也陳隋間入中國明丘濬曰國在玉門關外萬里其俗祀天不為像航海至廣州者始于其地創寺禮拜金元以後蔓延中國所至輒相親守其所謂教門者尤篤今在在有之職方外記回回中國之西北出嘉峪關云二初宗馬哈黙之教諸

馬哈黙ハ元明諸書に所謂黙徳那國王謨罕驀徳と云者にして。其建つるところの教ハすなはち所謂回ニ教また天方教といふものなり。ヒフ子ルス人名の書に載するところを按ずるに馬哈黙ハ亜剌比亜國の人にして其父ハ佛教の徒。母ハ「ヨーデン」の女なり。いにしへの世に如徳亜の國都「エリユサレム」城の廃せし時に其國人四方に散じ。その子孫今「アジア」「エウロッパ」「アフリカ」三大洲の諸國中に夥くありて皆其上古祖先よりの教を奉じてあへて改めざる。是を総称して「ヨーデン」と云。西洋中興の後第五百七十年。日本欽明天皇三十一年。唐土陳の宣帝大建二年庚寅にあたる。五月五日に亜剌比亜の黙加の地に生る。馬哈黙父の業を嗣ぐ大富の賈人なり。其後「ヤコビチヤ」教の徒バシラス人名「子ストリー」教の僧セルジウス僧名および

國多同。云ニ。梅回ニ國名タリ。今何レノ地方タルコトヲ辨セズ。或亜刺比亜ヲ指スカ。地馬哈默教ヲ修スレバナリ。コノ教法ヲセホメト称スルモヲ回ニ教トモイヘバナリ。又回ニノ音譯。何トイフ詞ナルカ。國名ナリトモ聞エズ。教法ノ名ナルベシ。回ニトモ云フヘキトコロニ。天方ト書

「ヨーデン」の人等に随ひて道を學び。諸教を混集して加ふるに奇異怪誕の事を以てし。遂に馬哈默教門を立て亜刺比亜諸國に教を施し。「アルコラン」又「コラン」ともいふといへる經典三十部を著せり。明人の説に其經有三十藏といへるものこれなるべし。後六百一十六年日本推古天皇二十八年唐土唐の高祖武徳三年庚辰にあたるの七月十六日に默加より遷りて默徳那において歿れ。壽六十二。因て其地に葬る。明人の説に随の開皇年中に其國人始めて其教を傳へて中國に入るといへりども西書の説に拠れバ馬哈默も陳隋より唐の世の初までの人なれバ隋の開皇中に其教支那に入るといふを詳ならず。上の説に「子ストリア」「ヤコビナヤ」「ヨーデン」等の教を混じて馬哈默教門を建つ。按に西書によるに西洋中興五百年の比に「子ストリア」の教を「カルデア」印度支那等の諸國に傳ふとあり。然れバ隋の開皇中に支那に入るの教ハすなわち「子ストリア」教なるべし。其墓。西紅海を去ること

キカヘアルナリ

三日程默加國王の都城を去ること四日程にして遠近諸國の人多く是に至りて拜礼す。又此地に美麗なる大寺觀あり。これ明人のいへる天方の礼拜寺なるべし これを名けて「ミスクヱ」といふ。これ至聖といへる義なりといふ 其規制方形にして。黒石を以て造成し。門および平所にも。皆白玉石を用ゐ。其外面長廊を造て窓および柱みな玉石なるを内にハ夥く燈籠を掛く。皆甚大にして其高八九尺或丈餘にいたる。外面に八六の大塔あり。其内に「ミナレーテン」といへる塔最高しといふ。然して其「アルコラン」の經文に載するところ奇説怪誕甚多し。計るに勝べからず。その天堂地獄の事を説くや曰。天堂に至るものハ未来永

劫歓樂を窮極して少くも検束なく美麗の少女毎日かはるがはるきたりて枕席を薦め種〻の飲食美味芳潔なるを供し浴するには乳汁香花の湯をもつてし居るには珊瑚明珠美玉百寳を以て造建たるの宮殿樓閣を以てす其地獄に墮する者ハ毎日烹割の千辛萬苦を受け死しては又死し終世盡ることなしといふその他事も皆是に類れたるをもつて西洋の人馬哈默をいひて「ハルセプロヘェト」と称れたり假聖といへる義なりて

印度國佛法の説

和蘭の人ウッウテル。スュウテンスが著れし東洋行程記に曰印度の諸國其人多く「ヘイデ子ン」の教を奉ぼそれ奉ずるところの神像種〻一ならず（按に「ヘイデ子ン」とハ佛法のごとくあらぬ種〻異形の像を祀る教の總名なり）其中に最尊むところのものハ「イツラ」「ビストニュム」「フラマ」「ラム」等の者なりこれら皆天中天なるものとして称して「オツブルユット」（和蘭語にて尊神といへる義）といひ其像を見るに皆甚巨大にして形容甚奇なりその頭面ハ人と異なることなしといへども三の眼ありて其一ハ額上の中央にあり十六臂ありて種〻の物を把る頸に玫瑰および諸種の花を掛けて飾となし虎皮を衣もて

なし象皮を外套となれ相傳ふ昔「イソラ」天より
て高山の頂に降る此時玫瑰諸花芳香芬馥し諸鳥
妙音を發し水土清浄にして奇相を現ハ「イソラ」則
國人に教を施し人ニ安樂得道せしめてのち再び天
に昇て去るといふ「イソラ」に配するの女神を「パシメ
スセンイ」といふ其像姿容温柔なり配合して四子を
生む之れを称して新神といふ第一子を「クエナバチ」
といふ「ワイケル°ゼエ」沙糖海といふ義なり極楽世界のことなりに居ありて之を
に主どり其像體ハ人に異なれどもその頭及
び牙喙とも象に似て然して四の臂あり第二子

を「シリ°ハニュマン」といふ之れ形容奇異にして頗獼猴
に類れ此像則意蘭國にて殊に多く是を奉じ其他
の印度諸州および支那日本等の國に至るまで之れ
像を奉じてこれをたふとぶゆゑに祠廟を設く第三子を「シュペ
ンニア」といふ其像六面十二臂なり第四ハ女神なるを
「パタラガリ」といふ其像姿容美麗なりといへども八面
十六臂ありて耳に懸くる寶玉珠以てしはゞ二の大
なる象牙をもつて飾となす此像王國「カランガノル」の
地におゐて殊に多く是を奉じその「ヒストニュム」ハおほき
なる一箇の尊神なり此神神通廣大にして變化

方なし。故に其變形種二一ならず。或半身獅子にして半身人なるもあり。或一頭四臂なるもあり。或美麗なる童子の形をなせるもあり。此他變形尚甚多し。また「ソヰケル。ゼエ」海沙糖に居る二人の美女それ傍に侍れ此神ハもつはら世界の人を保護するを主(ツカサド)るといふ。按にこれ観世音の類か。その「ブラマ」もまた尊神なり。其像人に異ならずして四の頭なり。或いはく。是天地を剏造(ザウ)するの神にして。其令に従ふところの大小の諸神多しと云。それ「ラム」といふものハ又一名「ラモ」と云。按にこれ釈迦なり。ヒフ子ルスが書に。印度にてハ「ラム」といひ。東京にてハ「シアカ」といひ。日本にてハ「シヤツカ」といふとなり。是いにしへの聖人に

して初て主尊の位に居りしが。其妃「シツタ」といふを辭して道を學び。按に。仏書に。釈迦いまだ出家をせずして浄飯王の太子なりしときの妃の名を耶須陀羅女といふ。シツタをすなはち須陀なるべし。また釈迦の始の名を悉達太子といふ。その音まさに近し。追て考ふべし。遂に一種の教門を興立して。東方諸國に教を施しく。其神通廣大なりといふ。これらの外の「キスナ」「インデルシヰト」「ラツシ」「カムダカ」等の諸神。又「ドルウペツチ」「ヂルシインデ」等の諸神女あり。按にヒフ子ルスの書に。南印度馬辣抜尓(マラバル)の諸國仏法を奉じ。其奉ずるところの仏像甚多し。ほゞ百種のみならずと記せり。凡其教中いふところ奇怪きはめて多し。或いはく「ヒストニユム」一隻(キ)の大鷹の上に座れ。世界ハ其鷹の牙邊になりと。按に。此大鷹ハ仏書にいはゆる金翅鳥の類ならん。又或曰。全世

界ハこれ一箇の大牛の頭上にあり故に其牛たまたま頭を動揺すれバ則地震ありと（梓に三才圖會に佛書の説を引て闍浮提ハ一の大鰲の背上にあり此鰲常に身の痒きを苦しミて其鱗甲を動かせバ則地震ありといふおほよそいふところと相似たり）又或いハく世界ハこれ今を去ること十餘萬年前に一の卵の中より生きたるものなりと又いはく人死してその霊魂生きて世に在りし時に其平生善良なる者ハ樂界に赴く樂界にハ「メルク。ゼエ」乳海「ソイケル。ゼエ」種種千數あり。それ悪き者ハ地獄に墮落す地獄にハ刺棘の深井あり鉄喙の鴉あり狰獰にして人を咬ミ食ふの犬あり。惨刺するの蚊蚋飛蟲ありかくのごときの者ますます種二千數ありて又いはく人類獣畜その形状ハ皆異なりといへども霊魂ハすなはち異なることなし故に身死するといへども其生来の善悪によりて業盡れバ再世上に生れて或人となりあるひハ獣やなるなどかくのごとくなる奇異なる説なほ甚多しといふ

日月を神とする説

和蘭語に日月星辰等を謂て「ナテユル。チイナアル。ゴット」といふこれ真の生神といふことなり西洋の画に日月を圖するに其中に人面の形をなすハこれ其生神といふことを表するの意なりと然して韃靼の部中曠

漠の地に一國あり「ハンダイ」といふ其人つねに日を以て神として毎事是を祈る又吩囉絨等の類の色赤きものを圓く裁して空に懸け日の像なりと称して是を拝祀すといふ又地理の書を按ずれば北亜墨利加洲は花地の野人また北海新増白蝋の小人等は日月を神として占術に祈乞し又亜弗利加洲「ニギリシア」の内に一國あり寡蝋太といふ其人他の鬼神を知らば推火を以て神となして是を祈禱し同洲「カツプルス」國も風俗きはめて卑くしてあるは禽獣に同じ故にうつく鬼神法教等を知らば然ども一種の晴雨を祈る法あり名けて「ホンメ」といふけだし其人屋居を知らず多くハ洞穴に居るも或僅に木枝をあみ建てて巣となして是に棲むが故に晴を喜び雨を愁ふるものなりて天もし晴るる時ハ相聚りて歓喜踊躍して其の霊感ありとし若陰雨すれバ悩怒きはめて甚く罵詈して已まずといふ

西洋雑記巻二終